

顔形態分析による対人印象の次元とその要因

川畑秀明^{1,2}・中村航洋^{2,3}・林慎太郎⁴

¹慶應義塾大学文学部 ²慶應義塾大学論理と感性のグローバル研究センター ³早稲田大学理工学研究院

⁴慶應義塾大学大学院社会学研究科

ABSTRACT

人の顔にはその人の健康状態や感情などを表す様々な情報が潜んでいる。また社会的な相互作用のために利用されうる様々な情報が含まれている。人は他者の顔に様々な印象を持ち、これまでの研究の多くから「情動価 (valence)」と「支配性(dominance)」が大きな要素として取りあげられてきている。

私たちが行った研究では、20歳台から50歳台までの様々な女性の顔写真に対して、18項目の印象の程度を尋ね、18項目の尺度の評定値をもとに情動価・支配性の主成分軸を抽出した上で、それらの程度に対応した顔の形態的特徴を形態分析 (geometric morphometric analysis) をもとに検討し、それらの対応した形態的特徴を明らかにした。また、形態的特徴をもとに情動価と支配性によって得られる軸上で平均顔画像を変容させ、実際、印象の主軸である情動価と支配性とが物理的特徴次元の変容の通りに感じられうることを確認した。

また、私たちは、20歳台の大学生男女の顔画像を撮影し、その人物にBig5パーソナリティ尺度に回答してもらった上で、そのモデル顔の写真を他者に提示して顔から感じられうるパーソナリティについて評定してもらった実験を行った。その結果、自分のパーソナリティが反映された顔形態の特徴は一部のパーソナリティ因子では確認されうるものの基本的には顔形態にパーソナリティが反映されているとく証拠は乏しいこと (男性において勤勉性・開放性因子のみ)、協調性因子を除いて基本的に顔から他者の真のパーソナリティ評価をすることは難しいことが明らかになった。一方で、他者が捉えるパーソナリティ印象は特定の顔形態パターンが見うけられるということが明らかになった。

今後は、顔の形態とその他の特徴 (顔色や質感など) との相互作用をもとに顔印象への影響について明らかにしていく予定である。